

専 門 教 養
令和 4 年 7 月
60分

受 験 教 科 等
中・高等学校共通 国 語

注 意

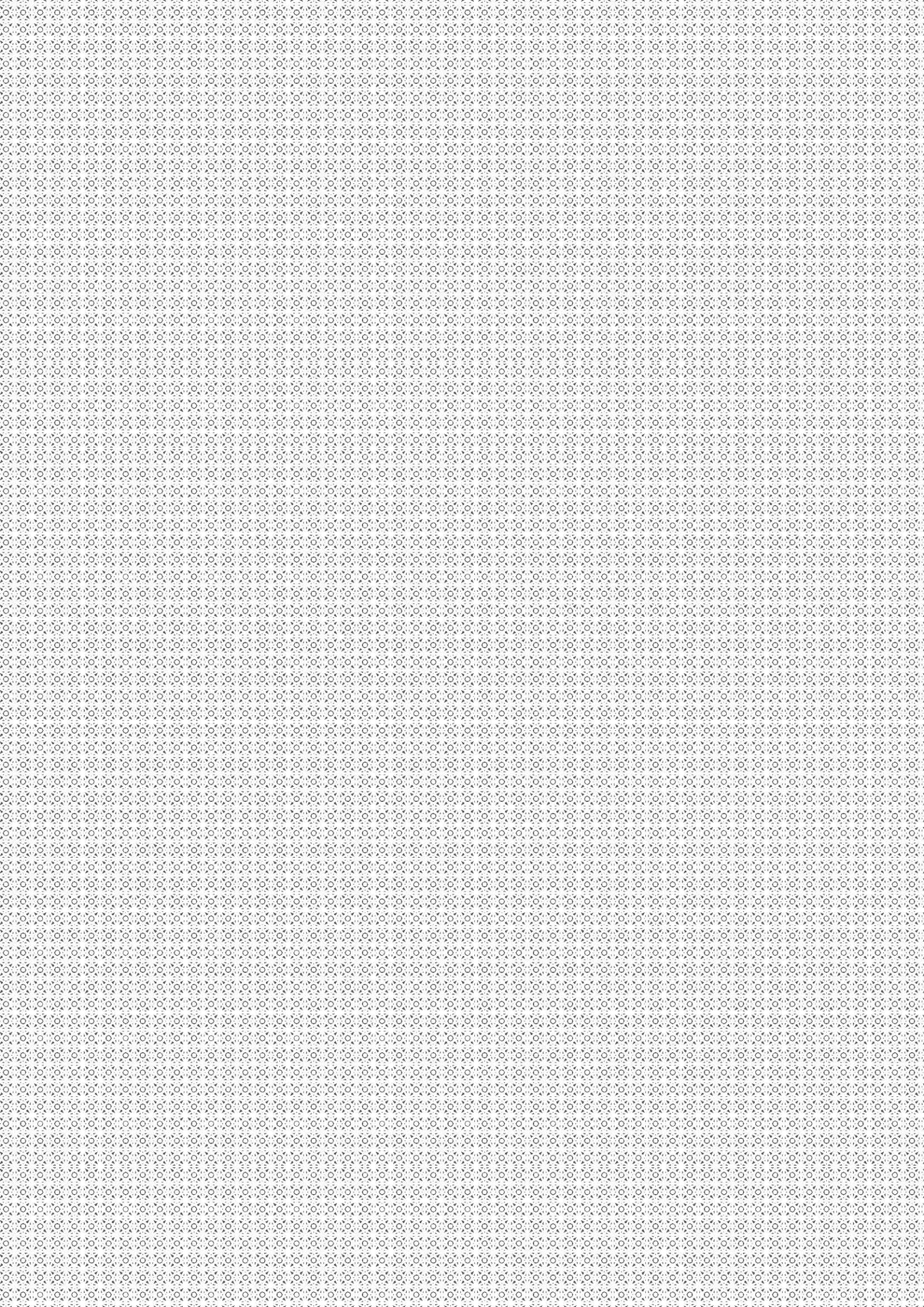
- 1 指示があるまで、問題冊子を開いてはいけません。
- 2 全て係員の指示に従って、静粛に受験してください。
- 3 机上には、受験票、筆記用具、時計以外のものを出してはいけません。
- 4 他の受験者の迷惑になるような行為、スマートフォン等の使用及び不正行為をしてはいけません。
- 5 解答時間は60分です。途中退出はできません。
- 6 問題冊子のページ数は、21ページです。はじめにページ数を確かめてください。
- 7 解答用紙に、**必要事項が正しく記入・マークされていない場合には、解答は全て無効**となります。解答用紙の【1】の欄には、**受験番号**を記入し、**受験番号に対応する数字をマーク**してください。【2】の欄には、**氏名**を記入してください。ただし、【3】の選択問題を表す欄のマークは不要です。
- 8 問題冊子の余白等は、適宜使用しても構いませんが、どのページも切り離してはいけません。
- 9 問題文中の「学習指導要領」は、特に指示がある場合を除いて、平成29年、平成30年又は平成31年告示の「学習指導要領」を表しています。
- 10 問題の内容についての質問には一切応じません。

解答上の注意

- 1 解答は、問題文や解答用紙の注意事項に従って、解答欄にマークしてください。各問に対して、正答は一つだけです。**各解答欄に二つ以上マークした場合は誤り**とします。
- 2 「解答番号は 1 。」と表示のある問に対して、3と解答する場合には、次の（例）のように解答番号 1 の解答欄の③にマークしてください。

（例）

解答 番号	解答欄
1	① ② ● ④ ⑤ ⑥ ⑦ ⑧ ⑨ ⑩ ⊖



次の文章を読んで、後の各問に答えよ。

(森田真生『計算する生命』による)

問1 傍線部(ア)～(ウ)のカタカナを漢字に直したとき、その漢字と組み合

わせて二字熟語になるものは、次の各群の1～4のうちのどれか。

解答番号は(ア)が 、(イ)が 、(ウ)が 。

(ア) ボウダイ

4 3 2 1
略 解 拳 満

(イ) カクゼン

4 3 2 1
企 新 悟 世

(ウ) ダトウ

4 3 2 1
結 賃 診 落

問2 傍線部(1)「

」とあるが、その理由として最も

適切なものは、次の1～4のうちではどれか。解答番号は

4

。

1 生命の本質は自律的なものであつて外界からの情報が表象を生み出し、出力ができるとされているが、研究の当初から揺るがず今でもそう考えられているから。

2 人工知能の探究が進み、人間を超える計算機能を有するようになったが、最先端の技術であつても動機を外部から与えられる点は生命には及ばず、自動的な機械の域を出ていないから。

3 現在では生命が外部を認知する時に、行為する動機を生み出すと考えられているが、研究の初期は外部からの情報の入力表象を生み出すと考えられていたから。

4 認知主体を認知主体の外部から観察する特殊な視点は、認知主体の外部と内部に世界を分ける発想を生み、生命は自律的なシステムであるというそれまでの仮定を覆したから。

問3 傍線部(2)「

」と

あるが、どういうことを説明したものとして最も適切なものは、次の1～4のうちではどれか。解答番号は

5

。

1 観察者が、他の生物の認知システムをありのままに捉えようとする時、生命の外部に本当の世界があるように見えるので、その生命が内部的に表象するものを再現するために、「入力―情報処理―出力」の形式を仮定してきたということ。

2 観察者が、他の生物の認知システムを他律的なモデルに基づいて捉えようとしても、認知主体の立場からは存在しない客観的な世界を想定することになるため、他の生命が認識する世界を再現することはできないということ。

3 観察者が、他の生物の認知システムを解明しようとする時、物理的な刺激とこれに応答する神経系の活動の間には、対応関係が認められたことから、生物は自分と独立にある外界を再現しようとしているということ。

4 観察者が、他の生物の認知システムを理解しようとしても、外部からの刺激に対する神経活動のパターンは無数にあるため、生物がどのように外界を内部的に表象しているのかは捉えようがないということ。

問4 XII 段落の役割について説明したものとして最も適切なものは、次の1～4のうちではどれか。解答番号は 6。

1 直前の段落で述べた主張を受けて、XIII 段落では、主張の一部について具体的に説明している。

2 直前の段落で提示された主張を受けて、XIII 段落で抽象的に言い換えて、問題点を指摘している。

3 直前の段落で述べた内容に基づいて、XIII 段落では仮説を立て、論を深化させようとしている。

4 直前の段落で整理された内容を踏まえて、XIII 段落では疑問点を提示し、論に展開をもたせている。

問5 次の記述は、ある生徒が、傍線部(3)「

」という部分に

ついて考えたことを発言した内容である。この発言を受けた教師の指導内容として最も適切なものは、後の1～4のうちではどれか。

解答番号は 7。

生徒 マトゥラーナ氏はこの研究で、「生命は外部からの情報を取り入れて、それを自分の中に置き換えるシステムを持っている」という立場に変わりました。この変化は生命を他律的なものに見るという最初の想定から導き出した成果でした。

1 マトゥラーナの実験の変化を最初の想定から遡って理解したことを評価した上で、X 段落をもう一度読ませることを通して、観察者の視点である他律的な視点にもう一度触れ、対立する自律的なシステムの情報の入力方法について理解するよう指導する。

2 マトゥラーナが研究の末に生命の認知に対する立場を変えたという理解をしたことを評価した上で、XII 段落をもう一度読ませることを通して、他律的な認知を想定していた当初の内容を理解させ、想定していた実験の根拠を理解するよう指導する。

3 マトゥラーナが研究の末に生命の認知に対する立場を変えたという理解をしたことを評価した上で、XIV 段落をもう一度読ませることを通して、自律的なシステムの発見には、マトゥラーナ自身の想定自体に変化があったことを理解するよう指導する。

4 マトゥラーナの実験の変化を最初の想定から遡って理解したことを評価した上で、XVI 段落をもう一度読ませることを通して、現代の科学者が、生命と同じような認知構造をもつ人工生命を作り出したことを知り、その功績を理解するよう指導する。

問6 傍線部(4)「

」とあるが、どういふことを説明したものと最も適切なものは、次の1～4のうちではどれか。解答番号は 8。

- 1 人間の知性を機械のようにしないためには、人工知能が人間を超える能力を持つものと恐れるのではなく、利用方法を考えるべきだが、人間は機械よりも上位の自律的な立場を維持するべきであり、それらが課題になってしまいうということ。
- 2 人工知能の技術は計算の域であり、表象を生み出す存在になつてはいないので、それを生み出す人間を超えてはいないが、人間が自律的であることをやめたときに、計算をする他律的な生命になつてしまい、人工知能に近付いてしまうということ。
- 3 人工知能は他律的な域を脱していないが、近い将来に自律的な能力を身に付けるため、その時も人間は他律的な行動をするのではなく、人工知能を扱う立場を維持した上で、人工知能と共生する社会を構築することを考えていく必要があるということ。
- 4 人工知能の能力と人間の能力を近付ける可能性を探る中では、人間が計算機に近付いていく未来の危険性があることから、人工知能の計算能力を生かしながら、表象を反復することで思考するような自律性を持つシステムである人間の可能性を広げることが求められているということ。

次の文章を読んで、後の各問に答えよ。

「東京っ子のぼく」が自然豊かな信州の旧制高等学校の寮に入ってから数か月が経ち、夏の休暇も終わりを迎え、もうすぐ秋の日が訪れる時季になっていた。

その数か月間、ぼくは「全人格をひとつの靴に捧げている」隣の部屋の「加島君」をはじめとする様々な人間と出会い、東京にいる頃には知らなかった様々なことを経験し、「自然」や「人間」について思索を深めるようになっていった。

問1 傍線部(1)「

」とあるが、「ぼく」が

このように考えた理由を説明したものとして最も適切なものは、次の1～4のうちではどれか。解答番号は 9。

1 ひとりきりで厳しい山々に登ることの危険性について加島君が親身になって説いてくれたのにもかかわらず、ぼくがその忠告を聞こうとしなかったことを反省したから。

2 全人格をひとつの靴に捧げているだけの加島君のことを軽蔑しそうになっただけでも、加島君のことも含めて「人間」のことを深く考えてみるべきだと思い直したから。

3 靴のことに専心してはくことなど大して気にしていない加島君の軽々しい言い方に反発心をおぼえる一方で、季節はずれの山には熊がでるといふ助言には一理あると考えたから。

4 不安を感じていたぼくに熊が出ると脅かした加島君に言い返したくなっただけでも、自分がそのような感情に流されずに無垢な状態でいる必要性をあらためて感じたから。

(北杜夫『少年』による)

問2 傍線部(2)「

「とあるが、このときの「ぼく」の気持ちを説明したものとして最も適切なものは、次の1～4のうちではどれか。解答番号は 10。

- 1 頂上に到達し達成感で満たされているが、燕山荘から出発してしまったことを後悔している。
- 2 必要にせまられて山頂に到達したが、時間的余裕のない状態になり、寂しさを感じている。
- 3 雪渓をさがしに山頂に行き着いたが、泊まる場所が決まっていない状況は変わらず、途方に暮れている。
- 4 ひとりで頂上に立ち太陽の光を浴びて満足していたが、その光が弱まり孤独感が強まっている。

問3 傍線部(3)「

「とあるが、この一文で始まる段落中の表現について説明したものとして最も適切なものは、次の1～4のうちではどれか。解答番号は 11。

- 1 「――」を二度使用し、さらには擬人法、反語法、倒置法などを使用することで、恐怖心が強まっていく「ぼく」の心情を効果的に表現している。
- 2 「――」を二度使用し、さらには擬人法、反語法、対句法などを使用することで、恐怖心が強まっていく「ぼく」の心情を効果的に表現している。
- 3 「――」を二度使用し、さらには擬人法、詠嘆法、倒置法などを使用することで、恐怖心が強まっていく「ぼく」の心情を効果的に表現している。
- 4 「――」を二度使用し、さらには擬人法、詠嘆法、対句法などを使用することで、恐怖心が強まっていく「ぼく」の心情を効果的に表現している。

問4 傍線部(4)「

」とあるが、このときの「ぼく」の気持ちを説明したものとして最も適切なものは、次の1～4のうちではどれか。解答番号は

12。

1 視線を上に向けることなく作業をせわしく続けていた間、空いっぱい星が広がり月光が地に届くようになり、自分の生きている世界が変わってしまったと思うほどの景観に驚き強く感動している。

2 頂きに立っているときは雪溪にたどり着けるか分からなかったが、わずかな時間で雪溪にたどり着き石油罐に雪を詰めることができたことで、神話の神が恵みを与えてくれたかのような気分になっている。

3 視界を遮り、山の姿をかき消してしまうほど濃かった霧がわずかな時間のうちに晴れ、それまでは畏怖する対象であった自然に對して美しさを見出すことができたため、心の中が安堵で満たされている。

4 夜空の霧が晴れて数多くの星座が見出せるようになったことから、自分が入寮してからずっと分からなかった問題の答えが明確になったような気分になり、人間の世界で生きていけるという自信をもち始めている。

問5 傍線部(5)「

」とあるが、このときの「ぼく」の気持ちについて説明したものとして最も適切なものは、次の1～4のうちではどれか。解答番号は

13。

1 「ぼく」は地獄のような別世界が星空に広がっているように感じていたが、落石の音をきっかけに、自分のいる大地も別世界の一部であるかのように感じるようになった。

2 「ぼく」は大景観に心を奪われて下界にいたいという意識を全く失っていたが、下界の音を聞いて我に返り、自分が下界の中にいるという意識がよみがえってきた。

3 「ぼく」は岩に腰かけながら神話世界の中にいるような感覚になっていたが、現実世界の音が聞こえ反響した後、すぐ近くにも神秘的な存在がいるかのように感じ始めた。

4 「ぼく」は濃霧が万物の根源であると思い人間と自然もはじめはひとつだったと考え始めていたが、自然の発する音に違和感をおぼえ、人間と自然とが対立するものだと考え直した。

問6 次の記述は、ある生徒がこの文章を読んだ後に、この文章を読んだ感想や文学史的な視点を含めて考えたことを発言した内容である。この発言を受けた教師の指導内容として最も適切なものは、後の1～4のうちではどれか。解答番号は 14。

生徒 夜空に広がる星座や月の光に照らされた山の姿の鮮烈なイメージと、「ぼく」の内面の細かい描写に圧倒されました。実際に登山して、夜、山頂に立った体験をしていないと、このような文は書けないのではないかと思います。

興味がわいてきたので少し調べてみたのですが、歌人の斎藤茂吉の子である作者は、高校時代に父の歌集を初めて読んで感動したそうです。そう言われてみると、本文中でも小説にしては独特なリズムを感じさせる箇所が多くあることに気付きます。まさにそれは日本伝統の韻文のリズムを継承した結果なのだと感じました。

1 「ぼく」の内面描写の細かさを読み取ったことは評価しつつ、作者と同世代の小説家である志賀直哉の『城の崎にて』なども読み、人間の内面を詳しく書き込む私小説が戦後隆盛していたことを確認するよう指導する。

2 この小説が作者の実体験に基づいて書かれていると推測していることは評価しつつ、小説『楡家の人びと』や随想『どくとるマンボウ航海記』など作者の他の作品と文体の特徴や効果について比較して考察するよう指導する。

3 歌人の斎藤茂吉の子である作者が文学に傾倒していきつかけが父の作品であったことを調べたことは評価しつつ、『悲しき玩具』など斎藤茂吉の代表的歌集も深く鑑賞して、読んだ作品が創作にどれほど影響を与えるものか考えるよう指導する。

4 日本の詩歌の伝統的リズムをもった文が多く含まれていることに気付いたことは評価しつつ、作者の他の作品も読むことで、この作者の作品で多く用いられているのは『古今和歌集』に多かった五七調のリズムであることにも気付くよう指導する。

三

次の文章を読んで、後の各問に答えよ。

（『藤簍冊子』『新日本古典文学体系』による）

問1 傍線部(1)

「」について解釈したものとして最も

適切なものは、次の1～4のうちではどれか。解答番号は 15。

1 かつては都に花が咲いている様子を和歌にして贈答していたが、年をとるにつれ、和歌を詠むことも難しくなってしまったということ。

2 数年前まではどんなに寒くとも都近辺の雪の降る様子を見に出掛けたものだが、友人たちとも疎遠になってしまった今では、外に出ようとしなくなってしまったということ。

3 今は都から遠く離れて暮らしており、都を訪れることができないため、当時雪の降る様子を見に行かなかったことを後悔しているということ。

4 今でも雪が降るとその様子を見に出掛けたいという気持ちはあるのだが、年老いてしまった体では、なかなか出掛けることもできずにいるということ。

問2 傍線部(2)

「」について解釈したものとして最も適切なものは、次の1～4

のうちではどれか。解答番号は 16。

1 積もったばかりの雪を冷たい風が舞い散らせているありさまが、冬景色の中にあるはずのない花吹雪を眺めている気持ちにさせると詠んだ歌である。

2 吹く風が木々に咲いた美しい雪の花をすぐに散らせてしまうのが残念なので、春を待ち遠しく思い心の中で花が咲く様子を思い浮かべて詠んだ歌である。

3 せつかく咲いた花が風に散ってしまうのは興ざめであるが、雪の舞い散る中に花卉が風で舞い上がるさまは神秘的であると詠んだ歌である。

4 風が吹いて空中に積もった雪が舞い上がる様子を見てみると、花は咲いたら必ず散るといふこの世の無常が連想されるということを詠んだ歌である。

問3 二重傍線部A・Bに共通する活用形として適切なものは、次の

1～4のうちのどれか。解答番号は 17。

- 1 未然形
- 2 連用形
- 3 終止形
- 4 連体形

問4 傍線部(3)「

」とあるが、「

」の理由を説明したものととして最も適切なものは、次の1～4のうちではどれか。解答番号は 18。

- 1 作者には月が出たのかどうかも分からないが、風の音や鴈の声に日が暮れたことを察し、夜空一面に月や星が明るく輝いている様子を思い浮かべ心を楽しませているから。
- 2 雪が降った庭に月が照り付け、目を閉じていてもまるで昼間のように明るく輝いていることが分かるほどの美しい景色が眼前にあることに作者は感動しているから。
- 3 老いて足腰の弱った作者は、どこまでも同じように照らす月の光がひっそりと暮らす自分の小さな庭までも明るく照らしにくれていることに心が癒されるから。
- 4 月が高く昇りどこまでも白く照り付けられた美しい雪原の風景を心に描き出すことが、老いて視力の衰えた作者の心を晴れやかにしてくれるから。

問5 傍線部(4)「

」について説明

したものとして最も適切なものは、次の1～4のうちではどれか。

解答番号は

19

。

1 「雪は都の物」と言った難波人に対して異を唱えてしまったことを思い出すにつけて、老いて頑固さが増してしまった自分を客観的に捉え嘆いているということ。

2 老いた身でもの寂しく過ごしていると、情趣を解する歌人仲間たちと酒宴や作歌をともにしてにぎやかに過ごした日々が自然と思い出されるということ。

3 他人が年を取ったことに対しては煩わしいことだなどと思う反面、自分も老いていることはつい忘れがちであると自戒しているということ。

4 以前はともに雪を眺めて歌を詠んだ難波人が自分の安否を気遣って歌を送ってくれていたのに、老いて返歌の気力も失せそのままになってしまったことを後悔しているということ。

問6 次の記述は、ある生徒が、この文章を読んで考えたことを発言した内容である。この発言を受けた教師の指導内容として最も適切なものは、後の1～4のうちではどれか。解答番号は 20。

生徒 雪のある日の作者の様子が描かれていることから、日記文学の要素もあり、また和歌とそれにまつわる物語のような構成からは歌物語との関連も感じました。老いた自分自身のことを「見るしく」と表現しながらも、一方でそんな自分を「三越路の山里人」に例えるところから、これは単なる老いに対する不平不満ではない作者のユーモアが感じられる文章だと思いました。

1 雪のある日の作者の様子が描かれているので日記文学の要素があることに注目したことについては評価しつつ、同じ作者が書いた『菅笠日記』と比較させることで、作者が紀行文とはあえて書き分け叙情的な表現を増やす工夫をしていることについて理解が深まるよう指導する。

2 和歌とそれにまつわる物語のような構成に注目したことについては評価しつつ、『伊勢物語』における和歌の効果と比較させることで、和歌を登場人物の心情を描き出すためだけではなく客観的な記録として位置付けようと試みる表現上の工夫について理解が深まるよう指導する。

3 自分を「三越路の山里人」に例えるところに注目したことについては評価しつつ、『万葉集』などの和歌の修辞法を調べさせることで、歌人でもあった作者が和歌だけでなく文章自体も見立てのような手法を取り入れて表現していることについて理解が深まるよう指導する。

4 単なる老いに対する不平不満ではない作者のユーモアが感じられる文章であることに注目したことについては評価しつつ、『猿蓑』の修辞法を調べさせることで、後の俳諧において滑稽や諧謔に芸術性をもたせる表現法に影響を与えたことについて理解が深まるよう指導する。

四

次の文章を読んで、後の各問に答えよ。(設問の都合で返り点・送り仮名を省いたところがある。)

(『古文真宝 後集』『新釈漢文大系』による)

問1 空欄 (1) に入る漢文を「たれかよくまどひなからん。」と読

み「誰が惑いのないことなどあり得ようか。」と解釈するとき、これを漢文に直して返り点を付したものとして最も適切なものは、次の1～4のうちではどれか。解答番号は

21。

4 3 2 1

問2 傍線部(2)「

として最も適切なものは、次の1～4のうちではどれか。解答番号は

22。

1 道理を学ぶに当たって、先の世代が、学んだことを後の世代に伝えていくことが先に生まれた者の責務である。

2 自分より先に生まれたか後に生まれたかではなく、道理を知っている人を師として学ぶべきである。

3 道理を知るのに、貴賤の別はないので、先に生まれた者が師となつてあらゆる人を教え導くべきである。

4 自分より先に生まれたか後に生まれたかは、見ただけでは分からないので、全ての人を師として敬うべきである。

問3 傍線部(3)「」

「についての説明とし

て最も適切なものは、次の1～4のうちではどれか。解答番号は

23

。

- 1 今の一般の人々は、師に従って学ぼうとしても師としての正しい在り方が世に伝わらなくなって久しいことから、師とする人物がおらず、学問からは大きく遠ざかってしまったということ。
- 2 古の一般の人々は、進んで師に従って物事の道理について学んだが惑いを無くすことは難しかったため、今の一般の人々は、師に学んでも惑いは無くならないと諦めてしまったということ。
- 3 古の知徳に優れた立派な人は、優れた素質をもっていたことに加え、師に従って学んでいたことから、今の一般の人々は、古の立派な人物にはさらに遠く及ばなくなってしまったということ。
- 4 今の一般の人々は、師に従って学ぶことを恥ずかしいと思い師から学ぼうとしないため、古の一般の人々と比べて愚かになることもないが、賢くなることもなくなってしまったということ。

問4 傍線部(4)「」

「と考える理由として

最も適切なものは、次の1～4のうちではどれか。解答番号は

24

。

- 1 師のあるべき姿とは、人間の在り方を教え伝え、惑いを解き道理を明らかにすることであるから。
- 2 親が子のために師を選んだとしても、親自身が師に学んでいなければ、ふさわしい師を見極めることはできないから。
- 3 書物の読み方という基本が理解できなければ、物事の道理という大きな真理も理解できないから。
- 4 物事の道理を理解するためには、師に従って学ぶのではなく、自己と向き合い深く思索しなければならぬから。

問5 傍線部(5)「」

「を「私には、その人がはっきりと物

を見る眼をもっているとは思えないのだ。」と解釈するとき、これを書き下し文にしたものとして最も適切なものは、次の1～4のうちではどれか。解答番号は

25

。

- 1 吾未だ其の明を見んや。
- 2 吾未だ其の明を見ざるなり。
- 3 吾其れを明らかに見ざるなり。
- 4 吾其の明らかなること未だしや。

五

学習指導要領に関する次の各問に答えよ。

問1 中学校学習指導要領国語の「各学年の目標及び内容」の「第1学

年」の「内容」の「思考力、判断力、表現力等」の「読むこと」において、身に付けることができるよう指導するとされている事項に関する記述として適切なものは、次の1～4のうちのどれか。解答番号は 26。

- 1 目的に応じて必要な情報に着目して要約したり、場面と場面、場面と描写などを結び付けたりして、内容を解釈すること。
- 2 文章を読んで理解したことや考えたことを知識や経験と結び付け、自分の考えを広げたり深めたりすること。
- 3 観点を明確にして文章を比較するなどし、文章の構成や論理の展開、表現の効果について考えること。
- 4 文章を批判的に読みながら、文章に表れているものの見方や考え方について考えること。

問2 高等学校学習指導要領国語の「論理国語」の「内容」の「思考力、

判断力、表現力等」の「書くこと」において、身に付けることができるよう指導するとされている事項に関する記述として適切なものは、次の1～4のうちのどれか。解答番号は 27。

- 1 自分の知識や体験の中から適切な題材を決め、集めた材料のよさや味わいを吟味して、表現したいことを明確にすること。
- 2 多面的・多角的な視点から自分の考えを見直したり、根拠や論拠の吟味を重ねたりして、主張を明確にすること。
- 3 文体の特徴や修辞の働きなどを考慮して、読み手を引き付ける独創的な文章になるよう工夫すること。
- 4 自分の思いや考えを明確にし、事象を的確に描写したり説明したりするなど、表現の仕方を工夫すること。

